

平成22年 5月19日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520390
 研究課題名（和文） 近世辞書の学際的・言語生活史的研究のための基礎研究
 研究課題名（英文） Basic research on modern dictionary for interdisciplinary and sociolinguistic approach
 研究代表者
 佐藤 貴裕（SATO TAKAHIRO）
 岐阜大学・教育学部・准教授
 研究者番号：00196247

研究成果の概要（和文）：

「節用集」は、江戸時代の国語辞典として最も利用されたものである。今後の研究のため、基礎的情報を整理した。

(1) 刊行年表を作成し、600種あまり（再版含む）を確認した。

(2) 江戸時代初期の節用集につき、出版事情を検討・整理した。

①易林本『節用集』平井版の諸本30本ほどの先後関係を確定した。②寿閑本『節用集』は、先進的な方針により編集・製作されていた。③寛永六年刊『節用集』の本文が、前半部は寿閑本の、後半部は横本『二体節用集』の本文であった。④横本『二体節用集』諸本に、新発見の異本を加えて系統関係を再考した。

研究成果の概要（英文）：

Setsuyoshu was most used as a Japanese lexicon in Edo era. Fundamental information was rearranged for a interdisciplinary and sociolinguistic approach in the future.

(1)The chronological table of published *Setsuyoshus* was made and the various version which extend to 600 kinds were confirmed (included reprints).

(2)Publication circumstances of early *Setsuyoshus* in Edo era were examined and arranged.

①The relations after a point among 30 variant prints of the *Hirai Kyuyo* edition were clarified. ②The *setsuyoshu* printed by *Jukan* was produced with an advanced policy.③The first half of *setsuyoshu* published in 1629 quoted from the *setsuyoshu* printed by *Jukan*,the latter half quoted from an oblong binding *Nitai-Setsuyoshu*. ④System relations among oblong binding *Nitai-Setsuyoshus* were reconsidered with the new discovery prints.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：辞書史・節用集・出版史・出版文化史・書誌学

1. 研究開始当初の背景

研究の基本構想は、近世辞書を言語生活史のなかで位置づけるために、隣接諸学問分野との連携を行おうとすることにある。本研究課題は、そうした連携の可能性や考えるモデルを導き出すための基礎的・試験的研究である。

(1) 国語学・日本語学における辞書研究

近世辞書の研究は、言語面（語彙・文字表記等）などを中心になされた。しかし、本来は、当時の言語生活のなかに位置づけることがまず必要であるとされている（時枝誠記『国語学原論 続編』「言語史を形成するもの」。岩波書店、1955）。この点、室町時代辞書では実践例があるが（安田章『中世辞書論考』。清文堂、1983）、近世辞書では同様の試みが極端に少なく、その面での検討が急がれるのである。

(2) 他分野からの注目

①一方、国語学・日本語学以外の分野からも近世辞書、ことに節用集とよばれる辞書群に注目するものが現われた。たとえば、節用集を文明史学の上から捉えたり（横山俊夫「日用百科型節用集の使用態様の計量化分析法について」。『人文学報』66、177-202頁、1990ほか）、付録中の画像部分を歴史学史料として価値づけたり（杉本史子「上品な日常知識の中の一覧図」。『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』33、17-20頁、2006）、『新日本古典文学大系』（岩波書店）の近世文学各巻では、施注に節用集を積極的に利用するなどの例があった。独自の要請により多様な視点・立脚点から近世節用集を捉えはじめたのである。

②それらの分野における知見は、国語学・日本語学とは異なる点からのアプローチであるだけに、むしろ、近世辞書のもつ社会的位置というものを教え示している部分が少なくなく、大いに刺激を受けるところであった。こうした知見は、先に記したような言語生活史からの辞書の位置を把握する営みにとって、有効でこそあれ、決して排除すべきものではないと考えられ、今後とも、是非摂取していき、近世辞書の定位のために有効に活用したいと思う。

ただ、一方では、隣接分野での検討においては、資料性への顧慮がなかったり、辞書ないし書籍に対する基本的な誤認・誤解もないではなく、そのために誤った方向に進みかねない側面もある。このような危険を未然に防ぐためにも、国語学・日本語学の知見を隣接

分野へ提供することが必要になっているのが現況なのであり、基本的な共通理解が不可欠であることに思い至った。

(3) 近世日本史学の動向

①最近の日本史学（これに教育史学を加えてもよい）では、文字・書籍への注目が著しく、ことに近世にあつては言語生活史（ことに「読む」生活）を学問分野として有している国語学・日本語学であっても、日本史学の側の短時日の蓄積ではあるけれども、少なからぬ部分を日本史学から教を乞う立場になっているとあってよい。こうした動きに触発され、佐藤も、ある特定層の言語生活・社会属性と辞書の使用状況を検討したことがある（『海民と節用集』、『歴史評論』664、46-58頁、2005。「村の節用集」、『岐阜大学国語国文学』30、21-34頁、2003）。その過程で痛切に感じたのは、やはり隣接諸分野との有機的な提携の必要であった。この経験が、本研究の構想を導きだすこととなった。

2. 研究の目的

以上のことから、将来における言語生活史の観点からの検討を実り豊かにするために隣接分野との連携をおこなう前提・準備として、近世辞書に関する基本的な情報の整理を行なうこととした。近世辞書といっても、隣接分野との接点が多くなることが予想される「節用集」に絞ることが有効と考え、これを中心に扱うことにした。

具体的には、次の2点をめぐることがらについて、近世節用集諸本を調査・検討することとした。

(1) 刊行状況の確認

現存諸本により、刊行年表の作成をおこない、近世節用集の有り様の基礎情報を準備する。

(2) 発展過程・系統把握の再確認。

①従来、近世節用集の研究は系統の把握を中心に行なわれてきた。が、比較的早期になされたものは近世極初期のものに限られるだけでなく、検討に十分な資料に恵まれているとはいえない状況でのものであった。そこで、近世節用集の出発点である近世極初期の諸本間の関係について、近世

②ほぼ同様のコンセプトだが、易林本『節用集』は、初刻本が影印により紹介されて以降、平井版への注目度がさがり、研究の進展がみられない結果となっている。そこで、改めて平井版諸本を検討することにより、近世極初

期節用集の発展過程のディテールを描くこととする。

(3) 近世辞書研究の先導役

国語学・日本語学には、訓点資料研究・抄物研究など、先行する資料学がある。これらは仏教史学・文学等にも重要な知見を供給しており、国語学・日本語学が隣接分野を先導しつつ連携を構成し、総合文化学を形成している。こうした模範例を念頭に、近世辞書を中心とする資料研究・文化史研究の展開への先導役としての辞書学を構築することも視野にいれる。

3. 研究の方法

(1) 2007年度

①本年度においては、次年度以降の研究の基盤を作るべく、基礎資料の調査・収集を主に行った。具体的には、近世通俗辞書の代表ともいべき節用集を中心として書誌的・国語学的調査を実施した。

②特に、これまでの研究において手薄であった関西地方の大学図書館・公立図書館をはじめ、必ずしも規模の大きくないコレクションなどにも手を伸ばし、十全を期した(例、龍谷大学・岡崎市立図書館・国立国語研究所・天理大学・神宮文庫・岡山県立図書館・香川大学・大阪市立大学・東京女子大学・東海大学)。

③これらの図書館等で対象としたのは、近世節用集全般ということになるが、当該図書館にのみ所蔵されるような唯一性の高い資料を中心とすることとし、これに準じるものとして近世極初期(慶長・元和期)の節用集について重点的に調査を行った。

(2) 2008年度

①前年度からの基礎資料の調査・収集を継続した。やはり、近世の通俗辞書の中心である節用集を主とする。

②前年度では他の所蔵者には見られないような唯一性の高いものを重点的に調査したが、今年度は近世辞書の出発点であり、本研究のような基礎的研究には欠かせない、近世初期のものを中心に調査した。ことに易林本『節用集』に注意を払い、いわき明星大学附属図書館・大谷大学附属図書館・茨城県歴史資料館等を中心に調査した。

③このほか、これまで調査を行っていなかった東洋大学附属図書館(哲学堂文庫)・神戸女子大学附属図書館・奈良県図書館情報館等でも近世初期節用集を中心に調査を行うことがで

きた。

(3) 2009年度

①研究計画の最終年度にあたる本年度は、これまでの調査を引き継いで、近世初期節用集の基本的調査を中心に書誌情報の収集を行なった。

②ことに『節用集』易林本のうち、平井版と称される異本の諸伝本の調査を拡大した。伝本間の相対的な先後関係を明らかにするためである。

4. 研究成果

(1) 2007年度

①東京女子大学蔵寛永六年本や、大阪市立大学蔵元禄三年本、岡山県立図書館蔵享保一〇年本など、これまで言及されることのなかった異本や、これまでに知られていなかった異本について初めて調査することができた。

②近世極初期の諸本においては、易林本平井版節用集と呼ばれる刊本につき、一定量の異本調査を遂行することができ、それらを比較することを通じて、これまで極く一部の研究者のみが研究の必要性を説きながらも手を着けかねていた同版間の階層的な先後関係について一定の見通しをえることに成功した。また、寿閑本と呼ばれる異本につき、易林本を的確に修訂していることが明らかになり、踏襲的・惰性的な刊行の少なくない近世節用集において特異なものとして位置づけられた。

(2) 2008年度

①前年度の調査によって初めて国語学的に検討された寛永六年本『節用集』(東京女子大学蔵)について、さらに検討をくわえつつ、その辞書史的・節用集史上における位置づけを試みた。すなわち、

a、同本を初めとする一群の節用集が寛永期に存したこと、

b、この群は、従来さして注意されない系統であり、近世節用集全般への影響も大きくないとされてきたが、そう結論するには調査が不足していること、

c、この群は前半部を寿閑本『節用集』(慶長15年刊)によりつつも、後半部は寿閑本と対峙する関係の草書本『節用集』の抜粋・横長本から本文を供給していること、

d、しかもその手法は、版下段階における切り貼りないし透き写しなどで可能な素朴なものとして推測されること、

などを明らかにすることができ、近世初期の節用集の編纂・改編事情の一端を示した。こ

の成果は、学会発表・論文として本年度内に公表することができた。

(3) 2009年度

①『節用集』易林本のうち、平井版と称される異本の諸伝本の調査を拡大し、累計20本ほどの伝本間に調査がおよんだ。これらの諸本間の相対的な先後関係も明らかにすることができた。このことにより、平井版の印刷に関する効果的な検討をおこなう準備がほぼ整えられたことが大きな成果であった。

②これにともなって、易林本のうち平井別版と称される異本が、どの段階の平井版をもとに複製(複製)されたかについてのより詳細な情報を得ることができ、かつ、平井別版が印刷されるようになって、別途、平井版の印刷が平行して行なわれたらしいことを指摘することができ、近世初期節用集の印刷のありようについて新たな問題を提起し得た。

③また、易林本の後継の一つである横本『二体節用集』の諸本について、これまで知られていなかった伝本の発見と、言及されてこなかった伝本をふくめての総合的な検討ができた。ことに横本で真草二行表示をとるために3巻化したことを手掛かりに、寛永期における『二体節用集』の圧倒的な流布の様子と、一方ではその急速な流行の終息とを同時に説明することができたのは予想外の収穫であった。

④また、本書の刊行を、住友財閥の祖・住友政友がなしていた可能性を指摘することができた。節用集の開版者および編纂者像の究明は、他の部面以上に検討の進展がみられないと言われているが、いささかの進展を見ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

①佐藤貴裕、横本『二体節用集』の研究課題、国語語彙史の研究、査読有、29、2010、pp. 205-218

②佐藤貴裕、易林本『節用集』平井版研究の基本課題、(月本雅幸ほか編) 古典語研究の焦点(武蔵野書院)、査読無(スカウト)、2010、pp. 897-916

③佐藤貴裕、近世節用集刊行年表稿、書物・出版と社会変容(「書物・出版と社会変容」研究会編)、査読無、6、2009、pp. 141-160

④佐藤貴裕、一七世紀節用集における検索補

助法、(国語語彙史研究会編) 国語語彙史の研究(和泉書院)、査読有、28、2009、pp. 157-175

⑤佐藤貴裕、易林本節用集研究覚書六題、(国語語彙史研究会編) 国語語彙史の研究(和泉書院)、査読有、27、2008、pp. 243-261

⑥佐藤貴裕、『節用集』寛永六年刊本類の本文系統、(近代語学会編) 近代語研究(武蔵野書院)、査読無(スカウト)、14、2008、pp. 137-152

⑦佐藤貴裕、寿閑本節用集の意義——慶長刊行節用集の記述のために——、日本語の研究、査読有、4巻1号、2008、pp. 46-59

[学会発表] (計2件)

①佐藤貴裕、拡大する狩野文庫——触発された辞書コレクションたち(特集テーマ: 狩野文庫の魅力と可能性、第51回「書物出版と社会変容」研究会、2009年10月31日、東北大学附属図書館二号館

②佐藤貴裕、『節用集』寛永六年刊本類の諸相——諸本・編集方針・時代相・系統——、第89回国語語彙史研究会、2008年4月26日、花園大学

[その他]

ホームページ等

「論文集」(「ことばへの窓」内)

<http://www1.gifu-u.ac.jp/~satopy/ron.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 貴裕 (SATO TAKAHIRO)
岐阜大学・教育学部・准教授
研究者番号: 00196247

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし